

平成27年度 「リフレッシュ瀬戸内」



鷺浦コミュニティセンターだより

双鷺洲

発行
鷺浦コミュニティセンター
電話/ FAX: 0848-87-5004
Eメール: sagiurac@mail.mcat.ne.jp

7月12日(日)佐木(長浜海岸)で27年度「リフレッシュ瀬戸内」が、天満三原市長をはじめ、港湾課・三原商工会議所・広島県東部建設事務所・国土交通省中国地方整備局・鷺浦町内会・鷺浦小学校・第二中学校・三原海洋少年団・三菱重工業(株)・JATA日本旅行業協会・尾道海上保安部・清港会尾道支部・三原市漁業共同組合・広島県栽培漁業協会・五洋建設・一般参加の合計302人で手作業によるゴミ収集、草取り作業を行い美しい海岸になりました。ゴミは捨てないで持ち帰るようにしましょう。



ヒラメの稚魚放流



ヒラメの稚魚

地元鷺浦小学校・幼稚園・子供達による稚魚放流

鷺浦コミセンからのお知らせ



7月21日(火)「70年目の夏」未来へのメッセージイベントに出品するキャンドル・ホルダー作りを鷺浦小学校で講師の先生をはじめPTA・ボランティアの皆さんと作成いたしました。

「卓球同好会」参加者募集について

開始月 9月第4火曜日 9:30から

申込み期限 8月20日(木)

申込みは鷺浦コミセンへ

電話: 87-5004

8月町内行事予定

- 1日(土) 和霊石地藏祭
- 8日(土) 町内会やっさ祭出場
- 14日(金) 3地区盆踊り大会
- 19日(水) トライアスロン役員会
- 29日(土) トライアスロン大会準備
- 30日(日) 第26回トライアスロンさぎしま大会

俳句・短歌

- ・陽がのぼる涼しき朝に啼く小鳥
 - ・野菜くだものやられたり台風にあかんたれ
 - ・可憐さとたくましき添なふ百合育つ
 - ・炎天に崩壊進む御守地藏
 - ・紅花や半夏一輪咲にけり
 - ・山背たち波濤砕くや碁石埼
 - ・老の坂歳経る毎に急になる
 - ・七、八年通い続けた野良猫君
- 終の住処はいずこになるや
喧嘩の傷痕痛ましい
- 牡丹 一草 ぶんか

1960年の映画『裸の島』の舞台となった宿禰島を募金活動などで購入、三原市に寄贈した、「新藤兼人監督と映画『裸の島』を愛する会」会長で近代映画協会社長の映画プロデューサー新藤次郎さんに、親子2代に渡る、宿禰島や佐木島とのかかわりなどについて、お話を聞きました。

粘り強く交渉して購入に

宿禰島が競売に出ると聞いて、映画から50年経っても手付かずに残った島が開発され、変わるのはいやでした。買い取った後、三原市に寄贈するという事で理解も得られ、動きを開始しました。

宿禰島は、既に山林になっていて、干満に合わせて船を着ける場所が変わってしまうほどだから、それほど利用価値はないと思っていたが、開札してみると10件の入札があり、落札できませんでした。

映画プロデューサー新藤次郎さんに聞く

宿禰島と映画『裸の島』

落札された方とはその時点から交渉を始めました。粘り強く交渉し、買い取ることが決まりました。

落札してからお金を集めることになっていました。そのため買い取りが決まり、改めて、柄本明さん、美術監督の部谷京子さん、三原シネクラブの中野義孝さんにも呼びかけ人になつてもらい、募金を開始しました。農協しかない佐木島の皆さんにはご不便をおかけしましたが、多くの方に協力していただきました。ありがとうございます。



宿禰島に設置された記念板 (新藤次郎氏提供)

北海道から九州まで全国から募金が寄せられ、「公開当時に見た」という方もいて、「映画の力ってすごいなあ」と改めて思いました。募金をしてくれた方に、会として尊敬を込め、記念板を島に設置することにしました。しかし、島には重機も入らないため、名前を残すことに賛同してくれた700人近くの方の名前を、8枚のプレートにして、人が担いで持ち上げ、設置しました。

作っているものとして冥利に尽きる作品

三原市には宿禰島を「映画文化遺産」として寄贈しました。あまり手を加えず、宿禰島のたずまいを残してほしいです。観光振興といっても、瀬戸内海は、マリンスポーツというより渡船などのほうが、とても新鮮に映ります。そうした瀬戸内海の島々の文化的な要素を大事にして、歴史ある地域の、その歴史に加えていただきたい。

映像に語らしめる作品

新藤は1950年に独立プロをつくって、それが10年もつたのですが、倒産寸前になり、

「地球上の人間、代表するのは家族」

新藤は広島県佐伯郡石内村(現在の五日市町)で生まれました。新藤の作品は、私小説ならぬ、私映画がいう側面があります。最後の映画となった『一枚のハガキ』もそうしたものが凝縮した作品でした。

新藤は丙種合格でしたが30歳過ぎで召集され、予科練航空隊の設営のため奈良県に派遣されました。それがおわると、くじ引きで100人のうち、10人を残して戦地へ行かされました。新藤は10人に残ったのですが、戦争は家族を破壊する、大黒柱を失った家族のその後の人生はかわってしまいます。その経験が澱のようになっていたのでしょう。

「地球上の人間、代表するのは家族」と言っていました。『一枚のハガキ』にも『裸の島』にも共通するテーマです。

新藤は、映画監督、脚本家であるとともに、独立プロのプロデューサーでもありました。当時からの独立プロは、近代映画協会しか残っていません。プロデューサーとしてどうやって来たか、もっと聞いておきたかったことがたくさんあります。



新藤次郎さん(7月21日、東京・赤坂にて)

最後に映画を作っておわりたいうことで、準備していたのが『裸の島』です。シナリオもできていました。別の用事で広島から尾道に向かうおり、夕暮れに宿禰島のたずまいに出会いました。

最後の作り方の原点にもなった作品です。ご存知の通り、セリフのほとんどない映画ですから、映画は映像こそが語ることを、語らしめることができるというところを実現した映画でした。1961年モスクワ国際映画祭に日本代表で出品。グランプリをとりました。ソビエト時代でしたが、3万5千ドルで買われた。1ドル360円の時代ですから相当の金額になります。そして64カ国で契約をしました。「言葉がわからなかったが、サインをしまくってきた」と言っていました。

たずまいを残して

わたしは70年に新藤の『かげろう』という映画にスチールマンとして参加し、映画人生を始めました。その時、三原も佐木島も宿禰島も訪れました。当時『裸の島』の面影はまだ残っていました。

それがすべてを決めたと思います。翌日には三原から船をチャーターして島にわたっています。

そして、13人のスタッフで佐木島の民家に分宿して撮影が始まりました。2人の子どもも地元で選んだ子でした。独立プロです。

「映像で本質伝えた」ということで、映画教材にもなり、世界で上映されています。2012年のベニチオ・デル・トロさんの来島にもつながりました。作っているものとして冥利に尽きる作品です。